





マルカは、混沌軍との戦闘に敗れ、亜空間に連れ去られていた。

そこは一面触手が蠢いていた。

マルカの身体は触手に巻き付かれ、宙吊りになって拘束されている。



「…んあ」

触手の出す熱と、生臭い粘液の臭いで、マルカは目を覚ました。



「…!!」

拘束されていることに気付き、マルカは身を振るが
今のマルカの力では、触手はびくともしない。

「く〜っ離せよお!!丸焼きにするからな〜!!」

魔力も、先の戦闘で使い切ってしまったマルカは
触手相手に怒鳴ることしかできない。



(ちょっと休めばこんなヤツ、すぐにメラメラ～なんだから～…)

魔力が回復すれば…そう思っていたマルカだが
マルカが目覚めたことで、触手が行動を起こし始めていた。

ニョロニョロと、マルカを目指し、触手が近付いていく。



「…!! 近づいてくるなっ!! あっちいけよっ!!」

それに気付いたマルカは
怒鳴って触手を威嚇するが、触手は躊躇う様子はない。



触手は、マルカの乳房の前で止まり、嘗め回すように眺めていた。
「見るなっ!!気持ち悪いぞお前!! 本当に燃やすからなっ!!」
触手に目はなさそうだが、その動きが
自分の乳房が露わになっていることを、マルカに思い出させる。
咄嗟に隠そうとするが、手足は触手に巻き付かれ隠すことも出来ず
マルカは頬を赤くした。



じっくりと乳房を眺めていた触手だが、ついに弄りたくなったのか
乳房の先端
綺麗なピンク色の乳首に、細い触手を絡めてきた。

「ひゃんっ!!」
急にきた甘い刺激に、マルカは思わず声を上げてしまった。



細かい触手が、乳首を撫で回すように刺激する。
「くう〜…ああ…ひんっ…」
「このお〜…触るなって…気持ち悪い…」
嫌がり、触手の責めに耐えるマルカだが
触手が、乳首をこね回す度にこみ上げてくる快感…。
(なんでこんなに気持ちいいのお…。触手なんか気持ち良くされたくないのに…)





触手は、マルカの乳首を飽きずに撫で回し続けていた…。
「はぁ…はぁ…あん…」
乳首への快楽責めに、魔力の生成に集中出来ないマルカ。
(エリザちゃんが助けにきてくれるから…)
魔法が使えないマルカは、仲間の助けを待つことしかできなかった…。
しかし、触手はマルカのことなど待ってはくれない。



突如。触手がマルカの乳首をグイグイと穿り始めた。
「ひゃああっ!! なにやってんだよ!!」
先ほどまでの撫でるような動きと違い、凄い力で乳首を穿る。
まるで乳首の中に潜ろうとしているような…。
「…おいっ…うそでしょお…??…やめろお…」
強気なマルカだったが、初めて触手に恐怖した。



そんなマルカのことなどお構いなしに、触手の乳首責めは激しさを増す。

グチュッグチュツ…グチュツ…

触手が動くことで出る粘液と、空気が混ざり合う音が、マルカの恐怖心をさらに煽る。

「うう…くう…うわあ…」

触手が乳首をしつこく穿ることで生れる、強く甘い責め…。

マルカは、恐怖心と快楽で、頭がおかしくなりそうだった。



ズブズブッ…

「ああ…うそ…」

マルカが恐れていた事態がおきてしまった。

乳首の中が熱い…じんじんする…。

そして、中に動く異物を感じる…触手だ。

入るわけがないと思っていた触手が、今…乳首の中いる…。



「絶対に焼いてやる!! 跡形もなく燃やしてやるからなあ!!」
マルカの叫びが、一面触手の空間に響き渡る。
触手に拘束され、魔力も回復できず、
変わらず不利な状況のマルカだが、叫ばずにはいられなかった。

触手は、マルカの叫びを聞いていたのか、しばらく動かなかったが...



どちらが上か。マルカに思い出させるように、触手はピストン運動を始めた。

「急にうごっ…おごっ!?おごっ!？」

急に動き出した触手と、自分の乳房が視界に入った。

その動きは、犬や豚の交尾のようだった。

(私のおっぱい…触手に犯されてるっ!?)

マルカから、先ほどの威勢はすっかり消え失せ、恐怖で背筋が凍った。



しかしそれさえも、触手が乳首の内側を擦る度に、快感が恐怖を上書きしていく。
「お…ごほっ!!…わたしのちくびいい…おかしくないでえ…っ!!」
怖いはずなのに、襲ってくる快樂の波が恐怖心を流してしまう…。
何も考えられない。
「あんっ!!あんっ!!あ…あああああ…っ!!」
ジュッポッ!! ジュッポッ!! ジュッポッ!! ジュッポッ!!



「ひゃああああああああん～あああああああっ!!」
ドクドクドクドクドクドク...

マルカが絶頂すると同時に、乳首の先端から白濁液が噴き出した。



「はぁ…はぁ…」
マルカは、息を荒くして、力尽きていた…。

マルカの乳首からは、
触手が出した白濁液が、逆流し溢れ出て滴り落ちている…。



チュポンツ…

触手はようやく、マルカの乳首から先端の細い触手を抜いた。



満足したのか、触手は、マルカから離れていった。

マルカもやっと息が整い、正気を取り戻す。

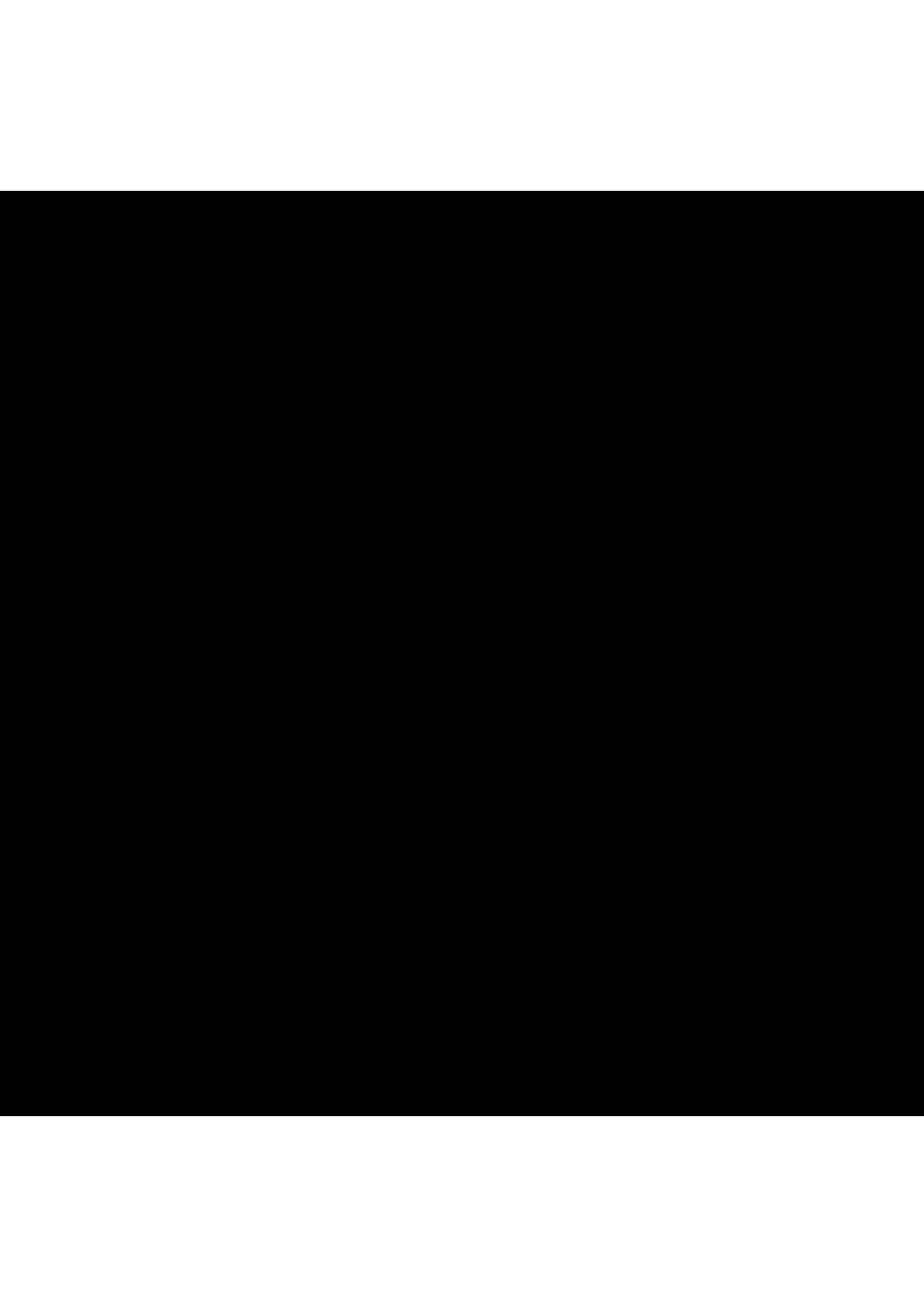
(私のおっぱい…)

自分の胸に目を落とした。乳首からは、触手に出された白濁液が滴り落ちる…。
触手に弄ばれ、胸を犯され、中に得体の知れない液を出されてしまった…。



「うう…」
涙が溢れる。
捕まったままなのに…脱出しなきゃいけないのに…。
「う…ぐすっ…うわああん…」

涙が止まらなかった…。





触手が去り、かなりの時間が過ぎたが、
マルカは、触手に手足を巻かれ、拘束されたままだった。
(なんで魔力が生成できないんだよお…!?)
触手が去った後。
泣いてはいたものの、マルカはすぐに魔力を生成し始めていた。
魔力が生成されていれば、今頃、辺り一面の触手は焼かれているはずだった…。



(…触手に出されたあの液だっ!!)
…とマルカが思った瞬間。マルカの身体に異変が起こった。
「おっぱいっ…熱いっ?!」
マルカの胸がジンジンと火照り始めた。
「はぁあんっ!!おっぱいっ!!焼ける〜っ!!」
胸が張ってきているのか、皮膚が痛む。



バルンツ…バルンツ…

マルカの胸は、どんどん膨れていき、
あっという間に倍以上の大きさになってしまった…。

「なんだよお…これ…」

(こんなおっぱいじゃ外も歩けない…エリザちゃんにも会えないよお…)



「うわぁあんっ!!」
マルカは泣き出してしまった。

触手に胸を犯されたことは、黙っていればわからないと考えていた。
しかし、この醜く膨れた胸は、隠すことはできないだろう…。
助かっても、前みたいな生活には戻れない。エリザロツテとも会えない。



そんな気も知らず、
マルカの背後から触手がニョロニョロと近づいてくる。

それに気づいたマルカは…



「よくもこんなおっぱいにしてくれたなっ!!」
「エリザちゃんと…どう会えばいいんだよっ!!」
「お前だけはぜー……ったいに許さないからなっ!!」
「消し炭にしてやるっ!!」

怒りのままにマルカは怒鳴った。



触手は、マルカの罵声など気にも留めず、マルカの秘部を自身の先端でなぞった。
「え…」

直前まで、怒りにまかせて怒鳴っていたマルカの顔が、一瞬で恐怖で歪む。
触手が自分と交尾をしようとしている…。

(やめろ…)

言葉にしようとした瞬間…。



ズブッ!! ズブズブズブッ…!!

自分の腕より太い触手によって、マルカの秘部はいとも簡単に貫かれてしまった。

「おおおおっ!! あ…がぁぁぁぁぁっ!!」

マルカは獣のような悲鳴を上げた。

今まで経験したことのない激しい痛みが身体中に響く。



ジュボッ!! ジュボッ!! ジュボッ!! ジュボッ!!

痛みに耐えるのに、精一杯のマルカのことなどお構いなしに
触手は好き勝手に動き始めた。

「おぼおおっ!!やめでえええっ!!お、おまんこおお…こわれちゃううううっ!!」

大きく膨れた乳房が、ブルンブルンと弾む。

「おっぱいもっ!!おっぱいも千切れちゃうからああっ!!」



マルカは、触手が自分の中で、徐々に固くなってきているのがわかった。
(まさか…)

「やめでえええっ!!膣内に出さないでえっ!!」

「ジアスと触手じゃっ!!赤ちゃんできないからあああっ!!」

触手の動きがさらに速く激しくなった。

「あああああああああっ!!!!!!」



ドクドクドクドクドクドク...

「ひぎいいいっ!!」

凄まじい量の精液が、自分の中に流れ込んでいくのがわかった。

「お...おえっ...」



大量の精液をマルカに流し込んで満足したのか
触手もようやく動きをとめた。



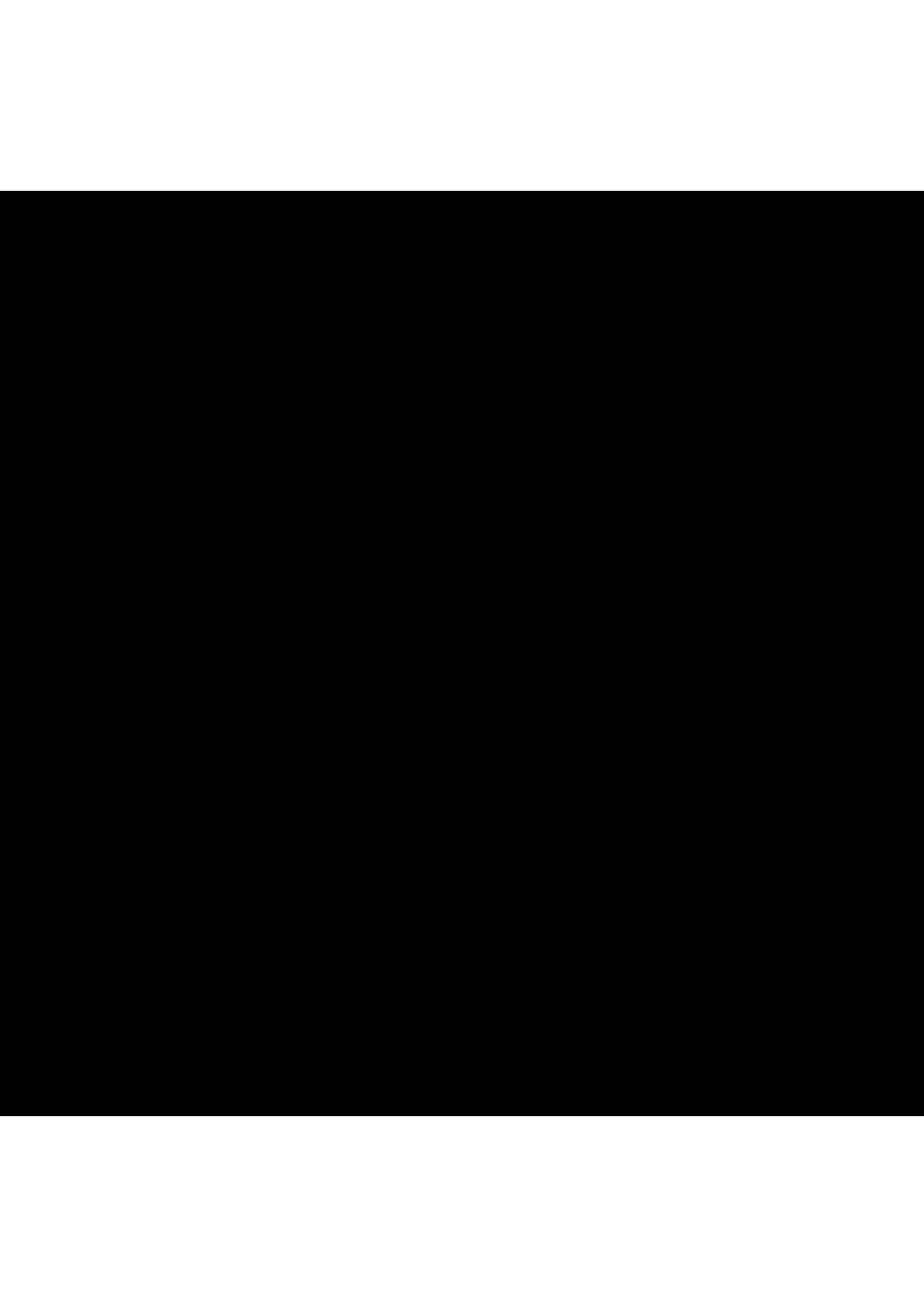
触手はマルカの膣内から出ていき、他の触手の中へと帰っていった。

ドロオオオ…ボタボタッ…

触手が出ていくと、マルカの膣内にあった大量の精液が溢れ出た。

「おお…ゴホッ…うう…」

マルカの意識は朦朧とし、やがて気を失ってしまった…。





しばらく時間が過ぎた…。

マルカは疲れ果てていた…。



しかし、触手はマルカの身体も求めてやってくる…。



「もう許してえよお…」
マルカの顔からポロポロと涙が溢れる。

プリッツア王国、魔法騎士団の騎士とは思えない姿だった。



身体に巻き付いてた触手が、マルカの肥大化した胸まで伸びていき、縛りつけた。

ぎゅうううう…

肥大化した乳房は、張っていて、じんじんとした痛みがあったが、それをさらに触手で縛りつけられてしまった。

「苦しいよお…痛いよお…」



巻き付かれ、固定された乳房に、触手が近づいてくる…。

「こないでえ〜…おっぱい触るのダメエ…」
今度は何をされるのか…どうになってしまうのか…。
「もう怖いのだぁ…」



カプッ!!

触手は、マルカの乳首に噛みついた。

ピリッ!! ピリッ!!

「くっ…あんっ…!!」

触手に肥大化された乳房は、敏感にさせられていた。

少し触れただけで、快感が電気のように全身を走る。脳が痺れそうだ…。



じゅるるるるるっ…じゅるるるるるっ…
触手は、マルカの乳首を吸い始めた。

「おおっ…おかしくなりゆからあぁっ!! またわかんなくなっちゃうからあぁあぁっ!!」
「きもちいいので…全部わかんなくなっちゃうかりやあぁあ…」



(ん…??)

マルカは、乳房の奥にある変化を感じ取った。

(おっぱいの奥から何かきてる??)

(何かがこみ上げてきている…じわじわって…これって…)



「おっばい…ちくびいっ!!そんな吸っちゃ嫌あああ…」

「奥からきてるっ!!母乳きてるうううっ!!」

マルカの乳房は、肥大化しただけではなく、母乳が出るようにもされていた。

じゅるるるるるっ!!じゅるるるるるっ!!

触手は、マルカに音を聞かせるように、乳首をより強く吸い始めた。

「…ああああああ!!だめええっ…もうでるうううっ!!」



プシャアアアアアアアアアアアッ!!

乳首から母乳が勢い良く噴き出した。
「おおおおおおっ!! 母乳出すのきもちいいいっ!!」



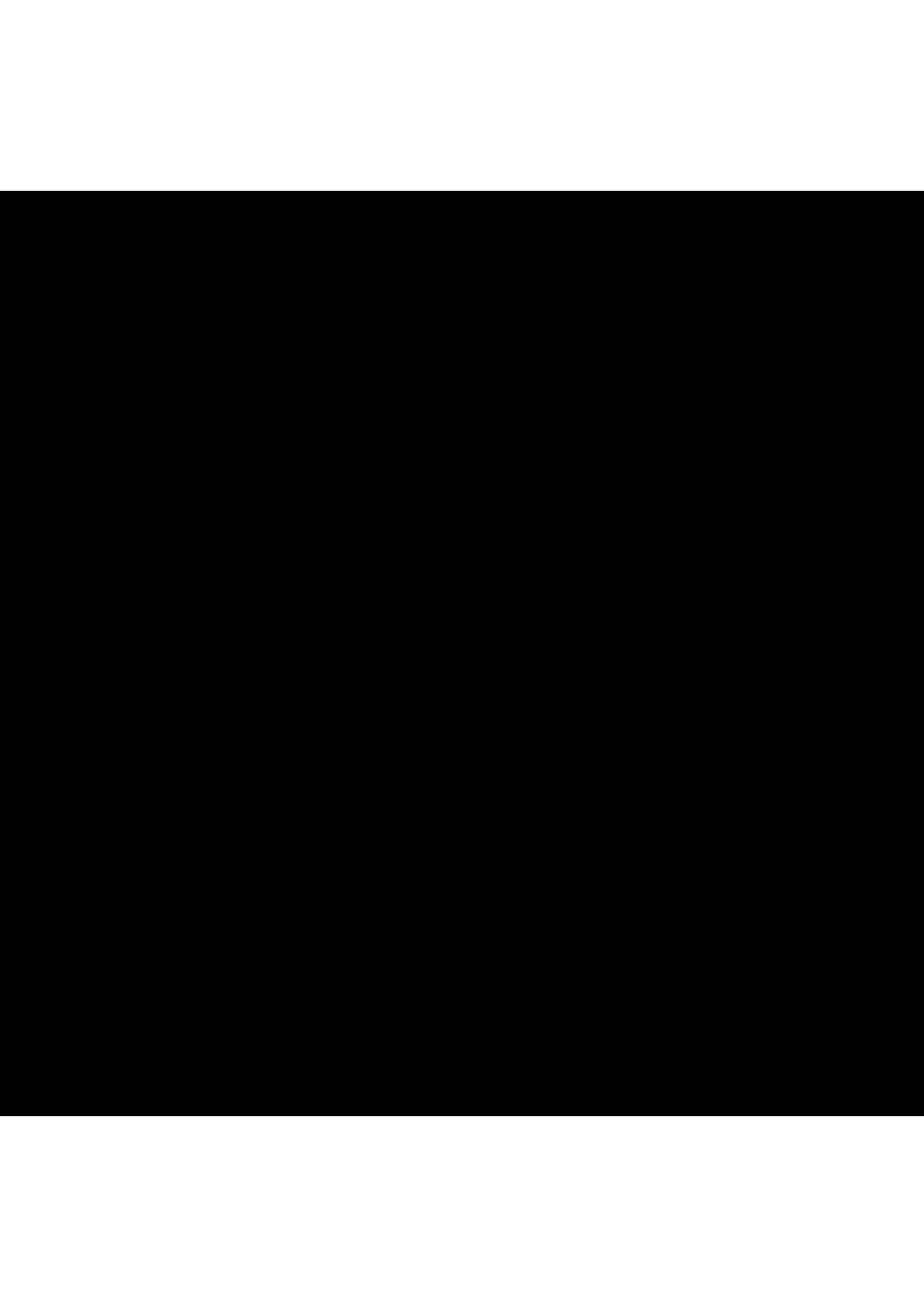
ゴキュツ…ゴキュツ…ゴキュツ…

触手が母乳を飲む音が聞こえる…。

「もっと…もっと…飲んでえ〜…」

マルカは、触手の腹を母乳で満たすように、自分も満たされていた。

満たされたマルカは、やがて眠りについた…。





マルカは目を覚ました。
触手に束縛され、乳房を触手に吸われている…。

……次に目を覚ましたら。
プリッツア王国にある。自宅のベッドの上なのではないか…。
触手に絶頂させられる度に、何度も思った…。これは夢なんじゃないかと…。



背後から触手がやってきた。



「ああ…」

もうマルカには、抵抗する意思もなくなっていた。
只々、触手に怯えていた…。

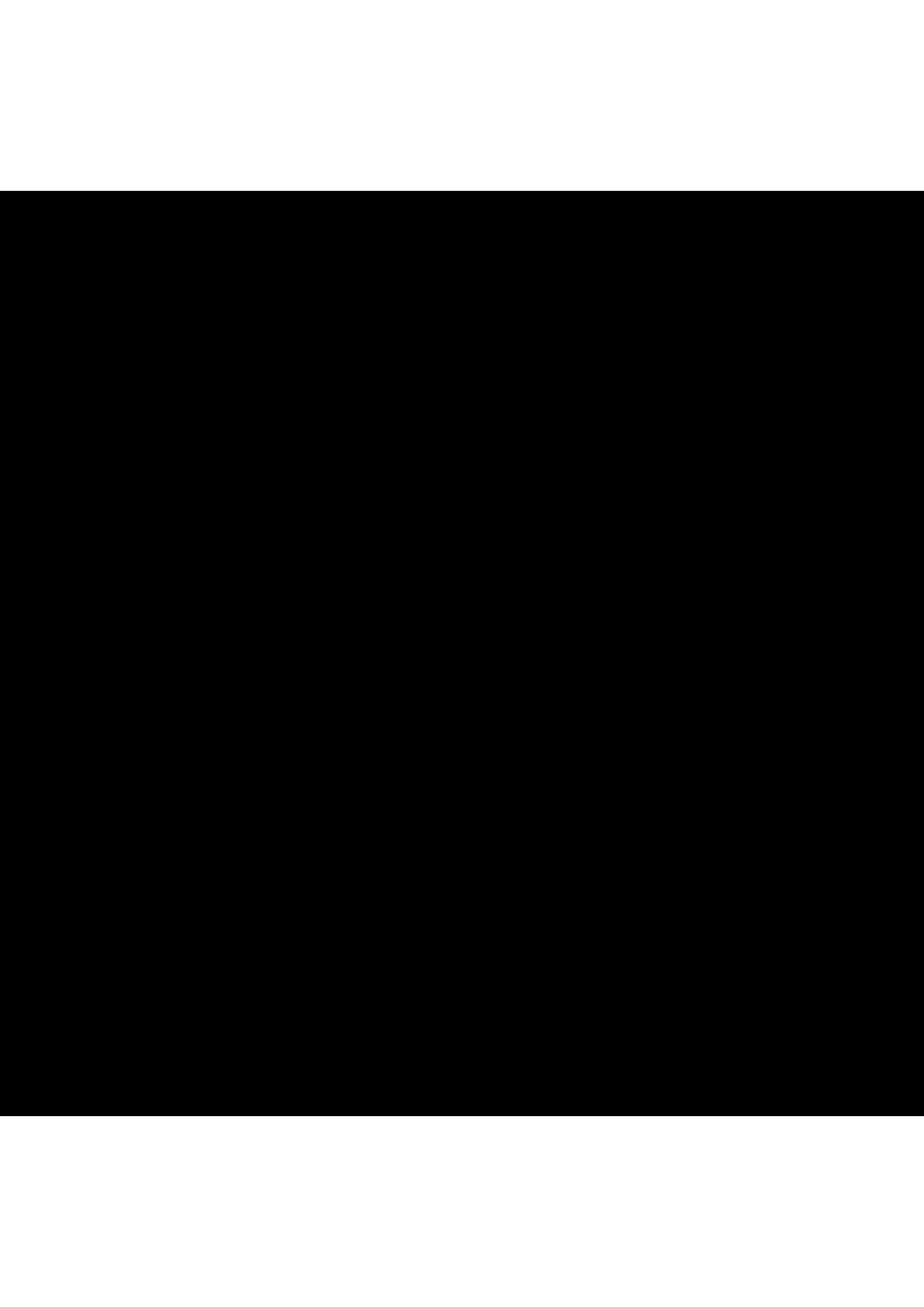
今マルカにできることは、許しを請うことだけだった。



「お願いしますっ!!もう許してくださいっ!! …お家に…お家に帰してください…」
マルカは、触手に泣きながら頼んだ。

…触手は何も言わない。

「…エリザちゃん…助けてよお…エリザちゃん…」





マルカが触手に捕まってから数か月経った…

「おごっ!!お…んひiiiiiiiiっ!! すごいっ!!すごいきてるううっ!!」

ジュッポ!! ジュッポ!! ジュッポ!! ジュボッ!!
触手の動きが激しくなる。



ブリュリユリユリユツ!! ブリュツ!!
触手からマルカに、大量の精液が注がれる。
「おお…!? おごっ!? …あ…あああ…」
「もっとお…もっとお…きもちいいの…ちょうだい…」

マルカは、苗床として新しい人生を送っていた。



ゴキュッゴキュッゴキュッ…

触手がマルカの作る母乳を吸う。

「おっばい…そんな飲んじゃだめだよお…」

「赤ちゃんにあげるぶんがなくなっちゃう…」

精液を吐き出し、満足した触手が、マルカの膣内から出てくると、
大量の白濁液が地面に溢れ出た。



その精液に混ざって、小さな触手が地面に落ちる。

「へへへ…また生れたあ…」

「すごいでしょ…エリザちゃん…」

「……んっ??…エリザちゃん…ってなんだっけ…??」

